

第7回 八王子市市民参加推進審議会（第7期） 会議録

会 議 名	第7回 八王子市市民参加推進審議会（第7期）	
日 時	令和4年（2022年）6月29日（水）午後6時30分～午後8時30分	
場 所	生涯学習センター（クリエイトホール）11階 第7学習室	
出席者氏名	委 員	小林勉委員、山本薫子委員、井出勲委員、岡崎理香委員、田中泰慶委員、星原徳之委員
	説 明 者	志村慶太（未来デザイン室長期ビジョン担当主幹）、櫻田ひかり（まちなみ整備部まちなみ景観課長）
	事 務 局	渡邊和樹（広聴課長）、宮野努（広聴課主査）、実森将人（広聴課主任）
	そ の 他 市側出席者	古川由美子（総合経営部長）、小俣英一（子ども家庭部青少年若者課長）
欠 席 者 氏 名	繁野遥香委員、山田真実委員	
議 題	1. 諮問事項「市民参加条例の運用状況の検証について」の議論 (1) 配布資料を基に意見聴取	
公開・非公開の別	公開	
非 公 開 理 由	—	
傍 聴 人 の 数	1名	
配 付 資 料 名	資料7-1：第6回八王子市市民参加推進審議会（第7期）会議録 資料7-2：第6回八王子市市民参加推進審議会まとめ 資料7-3：＜未来デザイン室＞市民参加実施状況報告書①② 資料7-4：＜まちなみ景観課＞市民参加実施状況報告書①② 資料7-5：令和3年度（2021年度）市民参加実施事業実態調査まとめ 資料7-6：市民参加実施事業並びに条例第6条該当事業に関する実施状況	
議 事 内 容	次ページ以降のとおり	

【議事内容】

開会

- 小林会長
- ・第7回市民参加推進審議会を開催する。
 - ・本日は半数以上の出席があるため会議は成立する。
 - ・傍聴を希望される方はいるか。

(事務局確認、傍聴者1名。小林会長、傍聴を許可。傍聴者入室。)

- 小林会長
- ・では「市民参加条例の運用状況の検証について」の議論に入る。

1. 諮問事項「市民参加の運用状況の検証について」の議論

(1) 第6回審議会の論点整理

- 小林会長
- ・資料7-2をご覧ください。「令和2年度(2022年度)市民参加実施事業実態調査まとめ」、「市民参加実施事業並びに条例第6条該当事業に関する実態調査」に基づき審議。

≪審議内容≫

[実態調査]

- ・市民参加実態調査の内容は条例に基づき実施したものであり実務的な印象ではあるが、市は、条例やガイドラインに沿ってしっかり取り組んでいた。

[調査事項の集計方法]

- ・Google Forms等のフォーマットでは、パブリックコメントのような定型的な選択肢での回答ではない自由記述を自動集計することは難しいが、選択肢形式のアンケート調査の場合には手作業で集計を行う必要がなく便利である。
- ・今後、LINEを活用した催事の周知、その内容の動画での視聴、Google Formsでのアンケート調査などが連動して一連でできるとよい。

[興味を持ってもらう工夫]

- ・パブリックコメント手続では、素案が分厚くなるとすべてを読むことが大変であるから、概要版に素案のどこのページの内容であるか記載し索引的に利用できるように工夫することで、素案の興味ある項目へ誘導することができる。
- ・パブリックコメント手続に興味があっても、素案を読んだり、わざわざ調べたりしてパブリックコメントを書くことはハードルが高い。誰でも書いてよいところをもっと前面に打ち出すことが必要であるとともに、専門用語が多く調べるのに時間がかかってしまうので、用語解説はセットであるとよい。

[市民参加方法実施にあたってのスキル]

- ・市民参加の方法を実施するには職員の技量が重要になる。全職員が平均的に身につけていないのであれば、やり方に差が生じてしまう。実施方法に長けている所管の技法の共有やコーディネートスキルを向上させることが必要である。

[忘れてはいけないこと]

- ・世の中では、内容を単純化してわかりやすく伝えたり、一瞬で理解したいということが普及している。深く考えることをしなくなると市や市民にとってプラスにはならない。市民参加への入口としての敷居は低くする必要があるが、わからなかったら自分で調べて、関心を持ってもらい、市民にとって広い意味での自覚につながる大切。

- ・情報には「早い情報と遅い情報」がある。現代はITが進化し、容易に検索し表面的な内容であればすぐに調べることができる。しかし、それだけでは真に理解することはできない。

(2) 配付資料を基に議論

小林会長

- ・ 前回の審議会の際に「市民参加条例の運用状況についての検証」にあたり、関係所管とのヒアリングを実施することとした。
- ・ 本日、未来デザイン室とまちなみ景観課とのヒアリングを実施する。
午後7時25分ころまで未来デザイン室、午後8時10分ころまでまちなみ景観課とのヒアリングをする。
- ・ 未来デザイン室長期ビジョン担当の志村主幹にお越しいただいた。
資料に沿って「長期ビジョンの策定」のために実施した市民参加方法についてご説明いただきたい。

志村主幹

- ・ 資料7-3-①をご覧ください。長期ビジョンは、基本構想に掲げる都市像を実現するための基本計画である。
- ・ 本日、机上配布した広報の最終ページ中段右側に三角形の図がある。一番上が「基本構想」である。基本構想は、「まちづくりの基本理念（人とひと、人と自然が響き合い、みんなで幸せを紡ぐまち八王子）」、6つの「都市像（私たちが目指すまち）」、「都市像実現のための基本方針」で構成されている。策定当時、市民184名で構成された市民会議から提出された素案を踏まえ策定された。基本構想部分は期限の設定がないため引き続き継承していく。三角形に戻り、基本構想の下の現行の基本計画については2022年度で期限が満了する。新たに策定する長期ビジョンは2023～2030年度までの8年間の計画を作成するため市民の声を聴きながら策定している。策定にあたっての市の視点として、長期的な視点を持ち、都市像を目指し、2040年の目指す姿を置くこと。中学校区単位で様々な市民が集まっていたいただき、地域づくりを進め、多くの主体と連携していくこと。多様な市民参画の機会を確保し市民意見を反映することを主眼に置き策定に取り組んでいる。
- ・ 次に、「みんなで目指す2040年の姿」としてみんなで目指すわがまち八王子の2040年の11の姿を定めた。また、「未来を拓く原動力」として長期ビジョンの取組を加速させるための原動力に「地域自治」「共創」を掲げ、「変革のキーワード」としてはデジタル・トランスフォーメーション（DX）とカーボンニュートラルを定め、重点的に取り組む内容として「重点テーマ及び取組方針」を定めている。
- ・ 資料7-3-①に戻り、計画策定にあたり実施した市民参加の方法は、市民、WEB、市外在住者、小中学生へのアンケート調査、中学校区別、高校生、大学生を対象としたワークショップ、パブリックコメント手続や学識経験者や地域で活動している市民等の16名による懇談会を実施した。
- ・ 資料7-3-②だが、市民参加の実施方法をまとめている。ワークショップに中学校区別の記載はないが、市では地域の顔が見える範囲として中学校区単位で地域づくりを進めている。37中学校区で2回ずつワークショップを開催し、延べ653名が参加し、自分たちの地域の「ありたい姿」、「それに対し自分たちができること」、「行政に取り組んでほしいこと」、「行政と一緒に取り組みたいこと」を取りまとめた。これらの内容も長期ビジョンに反映したいと考えている。

- ・資料7-3-①に戻り、「7. 意見の反映」だが、いただいた様々な意見を庁内で情報共有し、「みんなで目指す2040年の姿」や「重点テーマ・取組方針」として反映した。
 - ・「8. よりよい市民参加のための新たな実施方法」として、対象の拡大のため交流人口や関係人口の方々の参加、またコロナ禍であることからWEB会議やメタバースという新たな手法を取り入れる必要性があるのではないかと考えている。
 - ・「10. 市民参加とはどうあることが望ましいか」では、市民参加をきっかけに、気軽に社会活動に参加し、多様な活動につながることを望ましいと考え、ここに記載した。懇談会出席者からは、「自分が好きなまちの計画の策定に参加でき幸運であった」、「八王子に関するいろいろなことについて、専門家や行政から意見を聴けたという場がとても楽しかった」という意見をいただいたことは、正に市民参加であって、このような市民の方々が今後も何らかの市民活動、地域活動などに参加するきっかけになればと思った。
- 小林会長
- ・未来デザイン室からの説明に質問、意見はあるか。
- 田中委員
- ・私がワークショップに参加したときには、中学校区単位での市民が参加していたが、高校生、大学生は地域でのワークショップとは別に実施したのか。
- 志村主幹
- ・高校生は、市内に私立と都立の高校が19校ある。今回、全校に依頼し参加希望をとり、8校15名が参加した。参加者は、私立、都立、市内在住、市外在住の生徒がおり、高校生の立場から未来をどう考えるか意見を伺った。
 - ・大学生は、本市は学園都市のため大学コンソーシアムと調整し市内の大学に参加を呼びかけ、6大学21名が参加してくれた。市内在住、市外在住両方の学生がいた。
 - ・それぞれでワークショップを開催した。
- 田中委員
- ・学生からはどのような意見があったか。
- 志村主幹
- ・高校生、大学生ともに共通して「多世代交流をしたい」、「居場所がほしい」という意見をいただいた。
 - ・目的があっても、なくても、気軽に集まることができる場所があるといいという意見であった。コロナ禍ということから、つながりたい、交流したいという思いから出た意見かも知れないが、率直な意見として受け止め「つながり」や「交流」の機会を創出する行政としての取り組みを盛り込む必要があると考えている。
- 井出委員
- ・37中学校区を行政が考える地域として決めたが、八王子は市域が広いので今後、この地域が変わることはないのか。
- 志村主幹
- ・現行の「八王子ビジョン2022」の計画では、中学校区ごとの顔が見える地域づくり、コミュニティづくりの必要性が示されており、37中学校区でワークショップを実施した。今後も中学校区を基本としながら地域づくりを進めていく。
- 岡崎委員
- ・コロナ禍に顔が見える地域づくりということで37中学校区全てでワークショップを開催したことは、日程調整を含め大変だったと思う。
 - ・私も参加したが、「参加できて非常によかった」との参加者の声を聞く。自分たちの地域を、自分たちの意見でつくりあげていける可能性があるところが、参加者の満足感であったり、よかったと思える点だと思う。
 - ・現「八王子ビジョン2022」は184名の市民会議で素案をつくり、基本理念や都市像になった。
 - ・先ほど、長期ビジョン策定に向けた懇談会参加者の感想とともに、新たに市民活動

- や地域活動を行うきっかけづくりになると言われたが、正しくその通りだと思う。
- ・10年前に参加した市民にも、自分たちがつくったものだから、その後も見守らないといけないと感じ、これをきっかけに地域活動や市民活動に関わった人もおり、私もその一人である。
 - ・今回、37 中学校区 653 名が参加し、これからも市民参加してもらえる可能性がある方々が増えたので、今回のこの手法はよかったと思う。
 - ・また、37 中学校区でのワークショップをかわきりにして地域づくり推進会議を 37 つくるとも聞いている。顔が見える範囲で、地域の人が、自分たちの地域をつくり上げていく素地をつくったことは非常に意義があることである。
- 星原委員
- ・八王子市は市域が広く、多様な人もいると思うので、ワークショップ参加者等が発言した言葉も多様であり、長期ビジョンづくりでも多様なものをピックアップできたと思う。
- 志村主幹
- ・2040 年の人口は現在より 10 万人ぐらい減少する。人口減少により、経済の縮小、税収の減少も考えられる。そういう中でも、どんな理想の暮らしがあるのか、市民と行政が同じ目標を持てるよう描いたものが「2040 年の姿」である。
 - ・その姿に向かうにあたり、行政にとって財政面など厳しくなっていくので、行政が重点的に、確実に実施していくことを「重点テーマ、取組方針」として定めた。
 - ・参加市民の方々には、これからの社会がどうなるかをお話した上で、地域の方々から出された様々な意見を踏まえ 2040 年の姿を描いた。
- 星原委員
- ・ワークショップは多くの市民が参加できる機会であり貴重である。運営することは大変だと思うがこれを続けることで、市民参加者を多くできる意義があることだと思う。
 - ・今回の長期ビジョン策定の機会だけでなく、循環的に次の世代に続くとよい。
- 志村主幹
- ・今回、長期ビジョンでパブリックコメント手続や地域の意見を伺った。今後は、37 中学校区の会議体をつくる。ここでは地域課題について地域主体で考えるということや、地域と行政がコミュニケーションを図りやっていくことが必要であり、地域と行政との対話が大切になる。その中で、地域と行政との役割分担も明確になっていくと思う。
- 星原委員
- ・新たに、または継続して参加したくなるためにも、行政としてオフィシャルに意見を集約して、皆様からもらった内容を掲載し市民に還元することで、自分が出した意見が掲載されていることに気づきモチベーションも上がると思う。
- 山本副会長
- ・資料 7-3-②の「1. 実施した市民参加の方法」の最初のアンケートの対象者を伺いたい。
- 志村主幹
- ・16 歳以上の 5,000 名の市民を無作為に抽出しアンケートを郵送した。回答方法は郵送もしくは WEB である。
- 山本副会長
- ・WEB アンケートが普及しているが、回答者が紙と WEB で 2 重に回答した場合はどのように対応しているか。
- 志村主幹
- ・WEB アンケートの回答にあたり、ID などの対応をとっていないため、「長期ビジョン策定に向けた市民アンケート調査」と「長期ビジョン策定に向けた WEB アンケート調査」の両方に協力していただいた方も中にはいると思う。
- 山本副会長
- ・ワークショップは、市職員が担当して実施しているのか。
- 志村主幹
- ・高校生、大学生は対面での実施を大前提に考えていた。しかしコロナ禍で対面開催

が難しく、オンラインでの開催に変更した。ファシリテーターのノウハウの問題もあり委託事業者により実施した。

- 山本副会長
- ・ファシリテートやワークショップの進行は委託業者ということだが、市職員がファシリテートしたり、ワークショップを回した事例はあるのか。
- 志村主幹
- ・中学校区でのワークショップでは、7～8名の参加者に対し、職員2名がファシリテーターを担った実績はある。
- 山本副会長
- ・全国の自治体で参加型のワークショップがたくさんあるが、ワークショップは技法を身につけないと上手く進められない。市職員はどのようにワークショップ等の技法を身に着けているのか。
- 志村主幹
- ・37中学校区別のワークショップでは、各グループ2名ずつのファシリテーターが必要であった。そこで庁内で募集し、約80名の職員が参加した。事業者によるファシリテーターの研修を実施した。傾聴する、意見を引き出す、気持ちよく話してもらう雰囲気づくりなどを学ぶ研修を実施した。職員は意見を引き出すための、アクション、リアクションをしたり、質問を投げかけながらワークショップを展開した。
- 山本副会長
- ・未来デザイン室以外の課でもワークショップをしようと思うが、市の組織ではファシリテートの研修は個別に実施しているのか。
- 総合経営部長
- ・ワークショップを実施するからそのために研修をしたというのは初めてかもしれないが、職員研修のメニューの中にファシリテーション研修はある。
- 小林会長
- ・市が掲げている人財育成というものと、実際に窓口で対応する職員対応とのギャップを感じることもある。全庁的に浸透させなければいけないのではないのか。
- 志村主幹
- ・基本構想、基本計画は、市の最上位計画になる。その下には分野ごとの計画がある。目指すのは6つの都市像であり、そこに向け全職員が実施していくという方向性を持たなければならない。八王子未来デザイン2040策定に向け職員像のあるべき姿も見直しをかけていく。今回、最上位計画を見直すだけでなく、行財政のあり方や職員像のあり方を総合的に見直し、周知徹底を図りながら進めている。約2,600名の職員が同じベクトルに向かう意識付けを根気強く行う必要がある。
- 小林会長
- ・根気強くやっていく裏には職員全員の意識改革の難しさもあると思うが、同じベクトルに向かうための壁をどう感じるか。
- 志村主幹
- ・最上位計画を策定しているが、職員はこの計画にぶら下がる所管する計画に目が向く。それ以外に目が向く職員は少ないかもしれない。これが縦割りの部分だと思うが、個別の分野だけでは解決できない課題もあるので、縦の分野はありつつ、横の分野にもまたがり、各分野で何ができるか考え進めることが大事だと考える。今回の計画の特徴は、重点テーマ・取組方針を横断的な視点で策定している点である。
- 田中委員
- ・地域カルテを4中学校区で作成したが、それ以外では作成していないのか。
- 志村主幹
- ・川口、長房、南大沢、みなみ野の4か所で、地域の魅力、情報をまとめたカルテを作成した。今後、他の地域に広めていく考えである。
- 田中委員
- ・37中学校区全てでカルテを作成するスケジュールはあるのですか。
- 志村主幹
- ・残りの33中学校区については、作成の意向が強いところから進めていく。
- 田中委員
- ・37中学校区共通の地域課題や地域特有の課題もあると思う。すべてでカルテをつくれれば、それが浮き彫りになるので大変ではあるが作った方がよいと思う。
- 志村主幹
- ・本日配布した資料の「重点テーマ及び取組方針」の「未来へのつながりづくり」における「「地域づくり」を推進します」の意図するところは、37中学校区に推進会

議を立ち上げ、議論し、地域課題を解決していく取組につなげていきたいという思いを込めている。

- 岡崎委員
- ・準備会を経て地域づくり推進会議に移行するとわかっているワークショップ参加者の中には、次を待ち望んでいる人がいる。
- 志村主幹
- ・今年度中に声かけを行い、その後の展開は地域により進み具合が異なると思うが、市はサポートしていきたいと考える。
- 井出委員
- ・地域づくりのプラットフォームをつくっていくこと、そこで課題を抽出していくことはよいことである。それを実行するための後押しとして、人やお金が大切だと思う。
- 志村主幹
- ・地域と関係する職員のあり方や支援する方法も、地域づくりを推進しながら整理していく。
- 小林会長
- ・未来デザイン室の志村主幹、ありがとうございます。資料7-3-①②のとおり、市民参加条例の運用が多種多様に行われていることが確認いただけた。
 - ・続いて、まちなみ整備部まちなみ景観課の櫻田課長にお越しいただいた。「(仮称)八王子駅周辺地区屋外広告物地域ルール」の策定のために実施した市民参加方法について説明いただきたい。
- 櫻田課長
- ・八王子市の景観計画で定める重点地区ごとの特性を活かした景観形成を推進するため、景観に応じた屋外広告物の規制誘導を強化するルールをつくっている。今回、市の玄関口で、顔である八王子駅前にふさわしい屋外広告物ルールをつくらうというものである。
 - ・八王子市には6つの重点地区があり、高尾駅北口、高尾山の参道地区につき、八王子駅北口は3か所目になる。
 - ・これまでの経験を踏まえ、ルールをつくる前に30年後の八王子駅周辺の景観がどうなっているとよいか、共通認識できるスケッチを作成して、そのためには「何をすればよいか」、「どんなルールが必要か」というバックキャスト方式で進めてきた。
 - ・資料7-4-②をご覧ください。ルールの策定は現在進行形であり、実施した市民参加の方法は、多くの市民の方に屋外広告物について知ってもらうため商工会議所が主催する「わくわくフェア」に出展した。「良好な景観をつくる」をテーマに八王子市が屋外広告物賞を受賞した作品のパネル展示や、まちなみの模型を組み立てて、看板を付けてもらい、看板のデザインや色を考える子ども向けの体験コーナーを実施した。
 - ・令和3年に実施したワークショップでは、委託業者にルールの素案とスケッチをつくってもらうとともにワークショップやファシリテートを含め2か年の委託をした。7回実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により4回の開催となった。1回目のワークショップは予定より半年ずれ込んだ。
 - ・本日、机上配布したA3版の資料「八王子駅周辺地区 未来景観だより」に1回目から3回目までのワークショップの内容が記載されている。
 - ・1回目では中心市街地活性化協議会の学識経験者によるトークセッションを実施し、学生、市民により景観の形成に欠かせない要素である「アクティブ」からイメージを膨らませるために、どんな風に過ごしたいかについて話し合った。
 - ・2回目は、まちなみ景観課職員と学生でまち歩きを行い、八王子の価値を高める提

案や、新鮮な切り口からの提案をいただき大変盛り上がった。学生からの提案は、東京都立大学からは「U r a八王子」というのが楽しいのではないかと、「人々が集う場を現代の楽市楽座にしよう」というもの、国士舘大学からは「住む人が豊かに暮らせるまち」まちなかを公園化するというもの、工学院大学からは「緑・オープンスペースや、歴史的建造物に着目」するとまちが魅力的になるという提案をいただいた。

- ・ 3回目は未来のイメージスケッチを作成しようという内容で、八王子駅周辺地区で磨きたい「価値」を出し合った。参加者は、白黒の絵に緑が多い方がよいということでスケッチからはみ出すくらい緑を描いたり、道路は細い方がよいということで幅を狭くしたり、椅子があるとよいということで椅子を描き足したりした。
- ・ 4回目は市民と行政職員による合同ワークショップを予定していたが、新型コロナウイルス感染症のオミクロン株の影響により市民を呼ぶことが出来ず、職員だけのワークショップを開催した。参加方法は、会場での参加とオンラインでの参加ができるハイブリッド方式により実施し、土木職、建築職、中心市街地活性化、観光、環境、公園課などのまちづくりに欠かせない部署の職員により、スケッチを見て、自分の部署では何ができるかということを話し合った。今後、このスケッチを冊子にして活用することを考えている。
- ・ 次に、工夫をした点だが、市民参加を考える上で地元の方に参加していただくために市の広報で参加募集をしたものの、コロナ禍ということもあり応募があまりなく、商工会議所を通して地元商店主を紹介してもらい、さらに学生は、まちなみ景観課で地区まちづくりという事業の中町のまちづくりに参加している工学院大学の学生の方に声かけし参加してもらった。卒業後も継続して参加してくれたり、新入ゼミ生として参加してくれる学生がいる。また、技術系の部署では、ワークショップを実施するので来てくださいと声をかけると、自分たちが実施する際の参考になるので、興味を持って参加してくれることが多い。開催時間は、学生の授業終了後、商店主の営業時間終了後の夜に開催した。場所は、地元の方が立ち寄りやすい中町にできた「まちなか休憩所」の2階を借りて実施した。また、学生と一緒にまちなか歩きをしていると商店街の方が声かけしてくれるとともに、学生がまちなか歩きをしていることを知ってもらえたことはよかった。
- ・ コロナ禍で影響があったこととして残念だったことは、参加者を当初の予定より絞ることとなったことである。他にも、ワークショップの延期や開催回数が減ってしまい効果的なスケジュールを組むことが難しかったこと。また、ワークショップは、本来、地元の方、学生、職員で実施する予定だったが、コロナ禍により参加者を限定したことで参加者との対話に機会がなくなったことや、会場での参加とオンラインでの参加のハイブリッドによる実施では、会場の熱気に比べ、オンライン参加者は置いてきぼり感があり、工夫が必要だと思った。オンラインにより参加しても効果的な内容になるかの判断は難しい。さらにオンラインを併用することで専任職員が必要になり人手がかかること。それから合意形成が必要なものは対話の積み重ねが重要だと思った。また、新型コロナウイルス禍で、ワークショップがスケジュールどおりに開催できず参加者のモチベーション維持のために、参加者のところに訪ねて前回までの振り返りや、次回の内容を話すことでフォローをした。
- ・ ありがとうございます。先ほどの未来デザイン室とは違い、対象を狭めた中での

小林会長

- 市民参加の実施内容についてご説明をいただいた。
- 山本副会長
- ・屋外広告物の地域ルール策定がゴールだと思うが、そのためのルールづくりに落とし込んでいくためにワークショップ等を実施している途中にあるということですか。
- 櫻田課長
- ・そうです。将来の景観を考えるにあたり、看板を揃えた方がよいのか、小さくした方がよいのか、看板がない方がよいとかというルールづくりの議論になる。令和4年度（2022年度）では店先の緑化や、おもてなしの雰囲気づくりのためにフラッグを掛ける事業を展開する。また、歴史やまちの思いをまとめたコンセプトブック作成に向け大学と連携していく。
- 岡崎委員
- 櫻田課長
- ・まち歩きはワークショップ参加者が実施したのか。
 - ・まちなみ景観課の職員と学生がグループに分かれまち歩きを行い、それに引き続きワークショップを実施した。途中、お店の方との対話も生まれていた。学生は、提案するにあたりまちを知るためにまち歩きを行ったが、初めて歩いた学生が多かった。まち歩き後にワークショップを開催したので、いろいろな意見を聴くことができた。他大学の学生が集まり話し合えたことはよかったという感想もあった。
- 岡崎委員
- 櫻田課長
- 岡崎委員
- ・八王子や近隣に住んでいる方の参加はあったのか。
 - ・全員ではないがいました。
 - ・初めてまちなかを歩いた学生が多かったことで、新鮮な視点から見てもらえたのでしょうか。
- 櫻田課長
- ・学生がまち歩き中に撮影した写真を使い「こう感じた」「ここはすごくよい」という意見をもらい、若い人の視点や感じ方が伝わった。そのほかに、学生は、商店主から「昔、ここはこうだった」という話を伺えた。
- 岡崎委員
- ・今期の審議会では若い世代の市民参加がテーマだが、多くの大学生に参加してもらうことで、気づいたことや得たことはありましたか。
- 櫻田課長
- ・初めてまち歩きをして、「面白そうなお店があった」、「今度行ってみよう」などの声が出ていた。学生に関わってもらうことで、八王子のことを好きになって、八王子に住もうと思ってもらえるとよい。
- 岡崎委員
- 櫻田課長
- ・学生と長く八王子に住んでいる方の思いには、ずれがありましたか。
 - ・長く住んでいる方には「こんなことを考えたができなかった」という話を伺うことがあった。30年後のことを話している中では、「いいよね」と感じる部分は共通したこともあった。また、「今ならできるかもしれない」という思いで、ワークショップで出された意見を1つでも2つでもやっ行ってこうという雰囲気になっていた。
- 田中委員
- ・商店街も持ち主が参加せず、借主が参加してもなかなか進まないところがある。景観の観点からすると屋外広告物は、景観を損なうマイナスのイメージが強い。しかし、商店にとっては屋外広告物を出せないことは致命傷になる。景観を損なわない屋外広告物とはどういうものをルールに規定するのか。
- 櫻田課長
- ・地域ルールは地域ごとの特徴を捉えつくって行くものである。高尾の場合は、山が見えるように大きな屋上看板はやめるとか、色を華美にしないというルールにした。八王子駅周辺については賑わった方がよいか、落ち着いたものがよいかから考え始め、参加者からは帰宅してきたときにホッとできる看板がよいという話がある。しかし、まだどうするかまで決まっていない。ただ、デジタルサイネージというピカピカするものは時間を決めて利用してもらうとか、屋外広告物の大きさや面を揃え

るようにするかなどについて、具体的にはこれから決めていく。地元の方が守ることができるルールにしないと意味がないので、地域と一緒に考える。

星原委員

- ・看板等に関するルールを考えたとき景観を損ねるという問題はある。今、デジタルサイネージの看板、新宿には3Dの猫の看板があり、人を呼び込めるスポットになっている。渋谷ビジョンの場合には同時にいろいろ映し出せるため人を呼び込めたり、ゲリラ的に著名なアイドルが実施することでイベントとして人を呼び込めたりもする。八王子の場合、どうしたいか、同様なことをするのかどうかである。全部無しにしてしまうとそういうものが好きな若者などが寄り付かないということも考えられるので、バランスが大切になってくる。ただ、夜の時間にキラキラしたものはどうかと思う人もいるので、時間帯によって区別することも必要だと思う。デジタルサイネージが必ずしもうるさいものと決めつけない方がよい。

櫻田課長

- ・デジタルサイネージについてだが、屋外広告物条例上では音と光については規制をかけられないため、苦情につながっている。現状では、環境などほかの条例と組み合わせをお願いしている状況である。

星原委員

- ・夜の遅い時間に駅前のビジョンで子ども向けではないCMが流れ、これは大丈夫なんだと思ったことがあったので、そういうルールはあった方がよいかもしれない。

井出委員

- ・学生の意見は的を射ていると思った。行政はバランスよく聞かないといけないところはあると思うが、まちの魅力は今住んでいる人や店の家主よりも、外から見た方が的確に捉えていると感じることもある。実際、コロナ禍で放射線通りのビルもテナントが入らないところがある。学生の意見に「公園を散歩するようなまちなかに」とあるが、放射線通りはよいが、縦や横の通りは歩きにくい道で、我々もたまに車椅子や高齢者疑似体験を使いまち歩きをすることがあるが、かなり酷い。また、野猿街道も一方通行か、時間で規制してもよいと思う。今日は、景観の話なので趣旨が違うが、総合的に考えないといけない。立川はバリアフリー化が進んでいる。

櫻田課長

- ・まちづくりは再開発とセットだとやりやすいと感じている。八王子はそういう状態ではない。パーク1番街の道は、水が溜ってしまったり、凸凹しており、道路の所管と調整し一緒にこの道を考えていくことにした。商店街の人にも参加してもらい、自分たちはここでどんなことをしたいか、例えばオープンカフェ、スピードを出せないようにわざと道をジグザグにしたり、イベントをしたい、などの意見出しをしてもらい一緒に考えている。地元の人がどんなことをしたいかを実現できるお手伝いができることよい。緑に関しては、まちなみ景観課に緑化の専門アドバイザーがいるので紹介したりし、地元としての管理しやすさ、見栄えのよさ、どんな木にしたかなどについて一緒に考えていく予定である。

山本副会長

- ・学生はいろいろなワークショップに参加する機会をいただき、発言することでまち並みや景観に影響したりするを経験している。しかし、学生は八王子のことをあまり知らない。知らないからこそ新しいことを言える部分はあるが、一方でそれでいいのかとも思う。たまたま専門分野の研究室に学生として在籍していることで、ワークショップに参加し、思ったことを発言し、それが受け入れられる。これはとても恵まれたことではあるが、一方で、今回検討しているルールができたときには、参加した学生はすでに八王子に居ないこともある。それであれば、八王子でこれからも生活し、子育てもしていこう、同年代の方の意見も入れられるとよいと思う。一般の市民からすると、景観的には綺麗だが、自分の知らないところで決まっ

てしまったと思われぬようにすることが大切である。今後パブリックコメント手続もあると思うが、一般市民からは敷居が高い感覚がある。それであれば、選ばれた人だけが参加でき、自由にいろいろなことが言える比較的敷居の低い、参加型のまち歩きのワークショップへの参加の間口をもっと広げられるとよいと思う。

櫻田課長

・今回のルールづくりでは、途中で意見交換会を実施し、それまでに検討し出来たものに関して意見をもらおうと考えていたが新型コロナの影響でできなかった。八王子駅周辺部にはマンションが建ち、子育て世代が引っ越してきている。その方々にも意見を聴いてみたいと思っている。

小林会長

・秋田空港からリムジンバスで秋田駅までいくと秋田杉で表彰されたバスターミナルがある。利用者からするとバスターミナルで並ぶ通路が狭く、空港行きリムジンバスのチケット購入場所も狭いため、外に並ぶことになり、軒がないため雨が降っていると濡れてしまう。地元の方々が秋田空港を利用するときは無料駐車場があるためリムジンバスは使わないと思う。だから地元の方は不便さを感じてないかもしれない。計画等をつくる時学生、専門家の立場からの発言は大切ではあるが、利用者や生活者の視点も計画づくり反映する必要があると思う。有名な方の建築は素敵だとは思いますが、使い勝手がよいとは限らない。

櫻田課長

・中心市街地には、来街者を呼び込むための施策を展開してきたが、マンションが多く建設されたことで、そこに住む人が気軽に何かでき、長く滞留でき、日常的に使いやすいよう住んでいる人の意見が大切になる。

岡崎委員

・八王子は学園都市であり、その可能性やポテンシャルを活用していきたいと思っている。我々の市民活動の分野でも学生と一緒に市民活動に参加してほしいと声かけしている。

・ある時、大学の先生から聞いた話では、学生は無責任なところがあり、地域の人に迷惑をかけていないか心配でもあるから、学生の参加を手放しで賛成はしていないとのことであった。大学生だからすべてよしとはならないと思ってほしいとも言っていた。

・一方で、我々は新しい視点を必要としていることも確かであり、若い人に市民活動や地域活動に協力してもらうことで、エネルギーをもらったり、新たな視点からの意見をもらえることもある。我々も学生からの意見を全て「いいね」と言っているだけではなく、一緒に活動をしながら取り入れられるものと取り入れられないものを意見交換できれば、我々も、学生も、地域の方々も成長できると思う。だから、若い人、学生、外の人であっても活動に参加してもらい、協力をいただくことは大切だと思う。

櫻田課長

・学生に対し闇雲に頼むのではなく、学生がやりたいことと、行政側の施策をどのようにマッチングできるかを考えながら実施することで学生にも行政にもよい結果が生まれると思う。時間と手間がかかるかもしれないが、学園都市として学生と一緒にできることを探せるとよいと思う。

小林会長

・市民参加を促すときに難しいと感じていることはあるか。

櫻田課長

・まちづくりのためには、市民参加の方法を行うことは必要。どの方法をとることが最適なマッチングであるか、効果的であるかを選択することが難しい。

・まちなみ景観課職員はワークショップをやることはできるが、所管によっては難しいところもあるので、慣れた所管と一緒にできるとよいかもしれない。

- 小林会長
- ・まちなみ景観課の櫻田課長、ありがとうございます。
 - ・最後に委員の皆様から本日のヒアリングを踏まえた市民参加条例の運用状況の検証に関し感想等を伺う。
- 岡崎委員
- ・市民参加の重要性を改めて感じた。未来デザイン室では八王子全域の長期計画の策定ということで、37 中学校区で多くの市民が参加している。
 - ・一方で、審議会等への公募市民枠が1人や2人であるため、一般市民枠を多くできないかと思っている。
 - ・職員のファシリテーション能力の話題があったが、10年前に今の「八王子ビジョン2022」を策定したとき、各分科会に多くの職員が参加し、グループワークの中にも一般の市民の立場として職員が参加していた。職員が市民と一緒に、市民の思いを汲んで計画をつくり一緒に活動したことで職員も成長でき、市民も自分たちの声を聴いてもらえることで、まちづくりに参加できたと思え、市民ももっと頑張ろうと思えるし、成長できると思う。好循環や相乗効果が期待できるので、このような市民参加は必要だと思う。
 - ・職員により対応や資質の差はあるが、職員も市民と関わることで変わることができると思うので、市民参加を進める上では、職員も市民と一緒に関わるワークショップなどにもっと参加できると好循環が生まれると思う。
- 星原委員
- ・2つの所管の事例を伺い、思ったよりもパブリックコメント手続、ワークショップ等が行われていることを知れてよかった。計画の策定に際し市民参加を実施しても結果がでるまでには時間がかかり、参加した方がすでに居ないこともあるだろうが、参加したことで参加者がポジティブな何かを得られたというような、些細なことでよいので発信して見てもらえるようにできればよいと思う。
- 井出委員
- ・ファシリテーション能力は大切だが、我々を含めた公共的職員には、課題を掘り上げたり、抽出したりする、アンテナが求められている。ニーズは、「何か困りごとはありますか」と聞いて得られるものではない。日常の中での「ボヤキ」や「独り言」を汲み上げていくことが大切である。そのためには、日常から市民とキャッチボールできる関係性が必要である。まちなみ景観課では、八王子駅周辺地区屋外広告物地域ルール策定にあたり、ほかのまちづくりでの付き合いとも連携した市民参加があったりする。未来デザイン室は、長期ビジョン策定を機会に地域会議のプラットフォームをつくり、とてもよい流れができていると思う。あとは、対話の中でいかに課題を抽出できるかである。明星大学名誉教授で東京ボランティア・市民活動センター運営委員長長の渡戸一郎先生は、市民の質は変わってきているとお話されていた。そこには我々がやっている市民参加条例というものが、策定当時には最新のものだったが、その時と市民は変わっている。しかし、条例は容易く改正するものではないので、もしかすると感覚のずれが生じているかもしれない。そのずれを運用でカバーするのか、条例改正でカバーするのかわからないが、そういう部分の検証も必要になってくると思った。
- 田中委員
- ・未来デザイン室、まちなみ景観課ともに、市民参加条例の運用状況の検証にはよい事例であった。しかし、地域づくりの問題にしても、八王子駅周辺の景観づくりにしても、今、関係している人が一生懸命にやっていることはわかるが、八日町の通りなどではかなりシャッターが降りており、よいまちなみの景観づくりができるのだろうかと思ってしまう。この課題を考えないで、まちづくりと言っても八王子ら

しいまちづくりができるのか危惧をする。それを解決するには、市の職員、商店街、商工会議所などを入れてまちづくりをしないと、本当の意味での活性化できるまちづくりにならないと思う。

山本副会長

- ・近年、若い世代を含めて、地域の方々が関心を持ったり、自分にできることを何かしたいという意識を持っていると思う。しかし、それが市民参加という言葉となかなか結び付いてこない。例えば、ワークショップやまちづくりなど、参加しやすい機会はいろいろとあるが、これらが市民参加であると認識されていなかったり、認識のされにくさがある。他の委員のご発言にあったように、人々の地域への関わり方や暮らし方に関する意識は、市民参加という枠の中で考えたとき、当初、市民参加条例が作られた時とは合わなくなっているということだと思う。
- ・本日、話にでた「ワークショップ」という方法は参加の形として広まっており、それを経験してきている人もいるが、それが市民としての参加だという意識に結び付けていくためには、また別の仕掛けが必要だと思った。個別に見るととても成功しているが、それが全体として、市民参加や市民参加条例の運用にうまくリンクされていないところが、一つの課題になると思った。

小林会長

- ・市民参加条例の運用状況の検証ということでは、市民参加はかなり実施されているとの認識は、委員皆さんの共通した感想だと思う。
- ・一方で、枠からもれてくるような、パブリックコメント手続をやりました、ワークショップやりましたという部分もある。
- ・また、職員が市民と一緒にワークショップに参加したことで、後々好循環を生み出していったり、市民にもよい記憶が刻印されていくことはよいことである。
- ・また、現実とのずれもでてきている。市民参加をいろいろやっていますということでは満足してしまうと、本当のニーズを汲み取れないというところもある。市民ニーズの汲み上げ方は、常日頃からの市民と職員との関係性が非常に重要になってくる。それらがベースになり、多様な関係者の方々が巻き込む力がこれからの職員には重要になってくるのが浮き彫りになった。市民側も意識を高めることは重要だが、働きかけの先駆けとしては市民参加の条例をうたっている職員がそういう意識を一層強めていくことが、今後の課題として重要だということが浮き彫りになったと思う。

小林会長

- ・それでは、時間になったので終了します。

事務局

- ・最後に次第2「その他・事務連絡」について、事務局からあるか。
- ・第8回審議会の開催日程は、すでにお知らせしているとおり、10月5日（水）の午後6時30分から午後8時30分で、このクリエイトホール11階第7学習室にて開催する。
- ・また、答申の提出日程については、11月に本審議会から市長に答申を提出するが、市長や皆様と日程調整した上で答申日程をお知らせします。
- ・また、答申は審議会という会議の位置づけではないため、第1回審議会の際にもお話ししましたが、報酬の対象にはならない。ただ、これまで審議してきた結果を市長に提出する機会であり、多くの皆様のご出席をお願いしたい。

(3) 次回以降の議論の内容

小林会長 ・ 本審議会では2つの諮問事項について審議してきた。次回は、皆様からいただいたご意見、ご提案等の審議内容を、私と山本副会長にて答申（案）としてまとめ、その内容について皆様にご確認いただく。

2. その他・事務連絡

小林会長 ・ その他事務連絡について、事務局より説明を願う。

（事務局より次回審議会の日程、答申の日程を説明。）

小林会長 ・ 次回は10月5日（水）の午後6時30分から本日と同じクリエイイトホール11階第7学習室で開催する予定。日程については改めて通知する。

- ・ 本審議会から市長への答申については11月を予定し、日程については改めて通知する。
- ・ 以上で、本審議会を終了する。

閉会